

日本地質学会関西支部報

Proceedings of Kansai Branch, Geological Society of Japan

No. 103

1987年9月10日

日本地質学会関西支部(京都大学理学部地質学鉱物学教室内)

日本地質学会関西支部総会および講演会報告

日本地質学会関西支部の1987年度総会および講演会が、1987年6月27日(土)午後1時半より、京都大学理学部地質学鉱物学教室で開かれました。

総会(議長 武蔵野 実氏)

報 告

1. 1986年度庶務報告

会員について：支部登録会員(6月現在)316名、部会別：北陸・15、京都・92、阪神・127、山陰・19、四国・37、管外・26

総会・例会について：1986年度総会・講演会……1986年7月5日(土)京都大学理学部地質学鉱物学教室で、参加者32名、講演7。

関西支部・西日本支部合同四国例会。1986年10月25・26日、高知大学で。巡検2コース参加者49名。講演会参加者111名、講演数25。

2. その他の事項。日本地質学会1987年度役員選挙委員として斉藤文紀氏(地質調査所)を推せん。

1987年度関西支部役員選挙を実施。

関東支部より支部規約等の問い合わせがあり、回答。国立国会図書館収集部からISSN(国際標準逐次刊行物番号)の割り当て通知があった。

ISSN 0912-6627である。

3. 編集報告。支部報2回発行

№101, 6ページ。1986年9月1日発行

№102, 21ページ。1986年10月発行(西日本支部報との合併号)。

4. 1986年度会計報告(後記)。以上を承認

議 事

1. 1987年度活動方針。総会1回と例会を2回開催

する。うち1回は西日本支部との合同例会とする。

(1987年10月10・11日、徳島大学の予定)。

支部報は3回発行する、を決定。

2. 1987年度予算(別記)を決定。

3. 1987年度関西支部役員選挙結果を承認。

支部長：石田志朗(京大)

幹事：京都部会；大野照文，高須 晃，清水大吉郎(京大)

阪神部会；八尾 昭(大阪市大)

四国部会；石田啓祐(徳島大)

山陰部会；石賀裕明(島根大)

北陸部会；未定

関西支部会計報告

1986年度決算

収入	前年度繰越金	214,104円
	支部補助金(本部より)	59,100
	支部会費	230,000
	支部報100号売上げ	51,000
	貯金利息	36,324

計 590,528

支出	印刷費	63,000円
	郵便・通信費	127,300
	事務費	21,130
	例会費	50,000
	幹事会費	7,000
	繰越金	322,098

計 590,528

1987年度予算

収入	前年度繰越金	322,098 円
	支部補助金	60,000
	支部会費	250,000
	雑収入	10,000
計		642,098
支出	支部報印刷費	130,000 円
	郵便・通信費	150,000
	事務費	50,000
	例会費	60,000
	幹事会費	20,000
	予備費	232,098
	計	642,098

講 演 要 旨

丹波帯周山シンフォーム内部の中生界層序

田辺利幸 (同志社中学)

・丹波地帯研究グループ

丹波地帯研究グループでは、これまで、丹波帯中央部および北部の丹波層群について再検討を行ってきた。ここでは、丹波帯中央部周山シンフォーム部の層序の再検討の結果を報告する。

丹波層群は、その岩相と時代により2つの地層群 (I型, II型) に分けられ、II型地層群がI型地層群の上位にナップ構造をなして構造的に重なっていることが、石賀 (1982)、井本ほか (1982) によって明らかにされた。今回、再検討を行なった周山シンフォーム部には、II型地層群 (従来、丹波地帯研究グループにより区分された $a \sim l$ の12部層のうち、より上位の $f \sim l$ の7部層) が分布している。このうち、 g , j , l の碎屑岩層の年代について、砂散虫化石による検討を行なった。 g 層には、灰緑色のやや泥質な層状チャードが伴われ、その上位は酸性凝灰岩に移化する。この酸性凝灰岩から Isozaki & Matsuda (1985) による *Hsuum hisuikyoense*, *Laxtrum* (?) *hichisoense* が得られた。また、さらに上位の珪質頁岩からは、*Unuma typicus*, *Stichocapsa japonica*, *Tricolocapsa fusiformis*, *Dictyomitrella kamoensis* などが得られた。また、 j 層の黑色頁岩中に挟入する酸性凝灰岩からは、Matsuoka & Yao (1987)

講演会は座長徳岡隆夫・松岡 篤両氏で、6講演が行われました。(演旨は後記)。

参加者名簿：池辺展生、今村忠彦、石井健一、石賀裕明、伊藤英文、石田志朗、市川浩一郎、貴地康夫、木下 修、楠 利夫、桑原希世子、紺田 功、清水大吉郎、高須 晃、田中 淳、田辺利幸、徳岡隆夫、戸倉則正、中江 訓、中沢圭二、濱田潤一、堀 利栄、本田輝正、西村貢一、松岡 篤、武蔵野 実、弘原海清。

による *Archicapsa pachyderma* 群集に相当する化石が得られている。さらに上位の l 層では、黑色頁岩から産した *Parahsuum simplum* 群集や、含砂岩レンズ頁岩中に挟入する酸性凝灰岩から得られた *Canoptum triassicum* 群集など、後期三疊紀新世から前期ジュラ紀古世にわたる砂散虫化石が得られた。

これらの化石の資料と岩相を対比させて、模式層序を作成してみた。(第1図)。

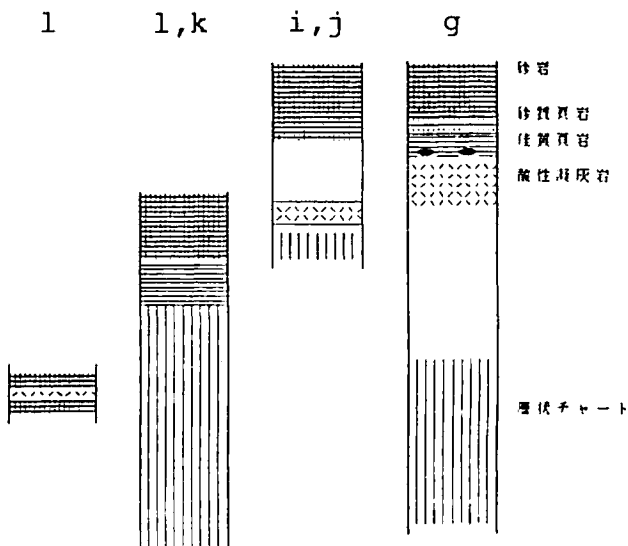
周山シンフォーム地域のII型地層群は、岩相と時代の違いにより3つのユニットに識別することが可能であり、各ユニットの碎屑岩層の時代が、より上位のユニットほど、同時代か、もしくは古くなる傾向が見られる。また、酸性凝灰岩層についても同様の傾向が認められるが、詳細は不明である。

現在、 g , j 層の上限の年代について、さらに検討を進めており、別の機会に発表する予定である。

Fig.1

Columnar Sections of the Type II Suite in the Shuzan Synform Region

		Yao et al. 1982	M. & Y. 1987
JURASSIC	Middle	<i>Guxella nudata</i>	<i>Tricolocapsa conexa</i>
		<i>Unuwa echinatus</i>	<i>Tricolocapsa plicarum</i>
	Lower	<i>Hsuwa hisuikyoense</i>	<i>Laxtarum(?) jurassicum</i>
		<i>Parahsuun sp. D</i>	<i>Archicapsa pachyderma</i>
	<i>Parahsuun simplex</i>	<i>Parahsuun sp. C</i>	
TRIASSIC	Upper	<i>Canoptus triassicum</i>	
		<i>Triassoceras nova</i>	
		<i>Triassoceras deverei</i>	



第1図 周山シンフォーム地域のⅡ型地層群の柱状図

丹波帯 Ⅱ型地層群周山シンフォーム
周辺の砂岩の鉱物組成の検討

楠 利夫 (キンキ地質センター)。

武蔵野実 (京都教育大学地学教室)

丹波帯に分布する丹波層群は、時代及び岩相の異なる2組の地層群に識別されており(石賀, 1983; IMOTO, 1984), 各地層群の砂岩の鉱物組成についても違いが認められている(楠・武蔵野, 1986; 楠, 1987)。その後、周山シンフォーム周辺の放射虫化石による層序の詳細な検討がなされ(田辺・丹波地帯研究グループ, 本支部報), それに対応して従来Ⅱ型地層群として一括していた砂岩が更に細区分される事が明らかになった。

報告する地域は、周山シンフォーム周辺のⅡ型地層群で、岩相層序、年代、砂岩の鉱物組成によって、見かけ下位よりTⅡa, TⅡb, TⅡcの3つの岩相層序に区分される(Fig. 2)。生層序学的なデータから模式的な層序を組み立てるとTⅡa・TⅡbは「緑色岩→チャート→砕屑岩」、TⅡcは「チャート→砕屑岩」の岩相変化が認められる(Fig. 3)。また、

各岩相層序に含まれる砂岩の岩相、岩質、鉱物組成にはTable 1やFig. 4に示す特徴があること、TⅡcに含まれるモノチス砂岩の岩質がやや異なっていることが明らかになった。砂岩の検討地点は、Fig. 2に示す。

以上まとめると

- ① 周山地域のⅡ型地層群は、岩相層序、年代、砂岩の岩質より3種に区分される。TⅡa, TⅡb, の砂岩の組成に差は認められなかったが、TⅡcは岩片が多い点でやや異なっている。
- ② モノチス砂岩は、TⅡcと類似の鉱物組成を持つが、岩相、破碎変形などがTⅡcの砂岩とは異なっている。
- ③ (TⅡa→TⅡb→TⅡc)と砂岩の岩片量が増加するとともにシンフォーム内部に向かって古くなる傾向がある。
- ④ TⅡa, TⅡb, TⅡc, のユニット区分は、丹波帯のより広い地域についても適用できる可能性がある。

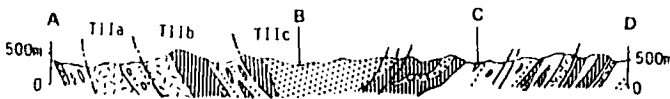
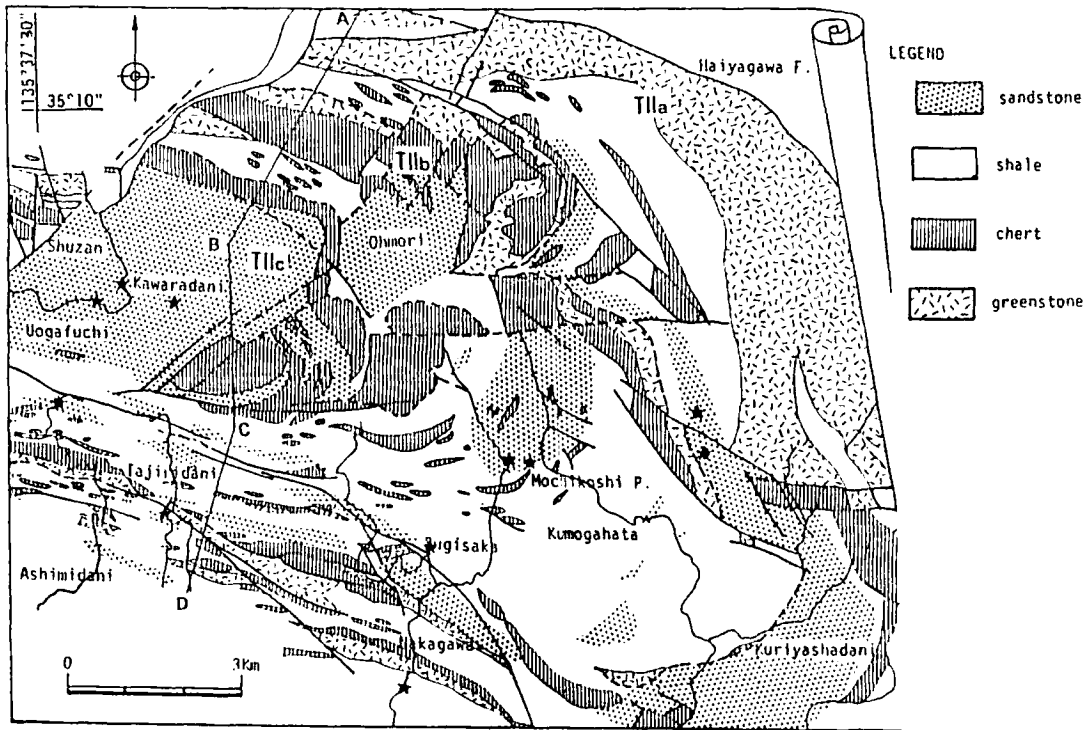


Fig. 2 Geological map of the shuzan synform in the Tamba Belt modified from Ishiga(1985). Tamba Belt Research Group(1975) and Imoto et.al.,

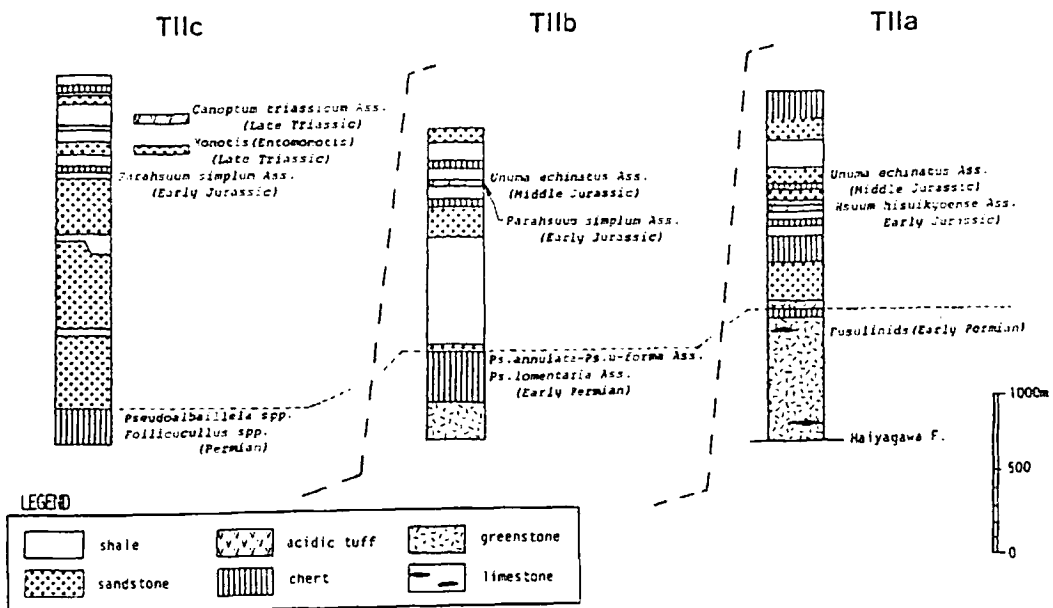
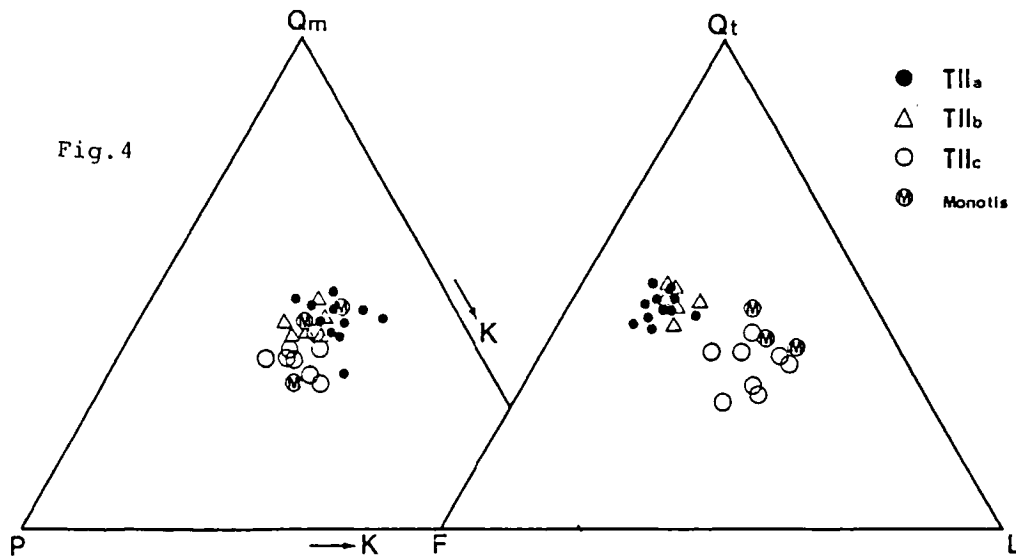


Fig. 3 Generalized columnar sections of the central Tamba Belt and that characteristic fossils modified from Imoto(1984) and Tamba Belt Research Group(1975).

Table 1. Average component of major mineral(%) in the sandstones of each unite of Tamba group.

	T II a	T II b	T II c	ε/α砂岩
時代	中期ジュラ紀	中期ジュラ紀	前期ジュラ紀	後期三疊紀
色調	灰色	灰色	灰黒色	黒灰色
基質	10.7	12.6	14.0	12.5
石英	39.8	38.6	29.0	35.8
長石	34.2	30.8	25.0	18.6
岩片	13.5	16.4	31.4	32.5
重鉱物	1.1	0.9	0.4	0.5
白雲母	0.7	0.7	0.2	0.1



Qm-K-P and Qt-F-L plot for detrital modes of sandstones from the Shuzan synform in the Tamba Belt.

丹波地帯中央部河内谷のベルム系

清水大吉郎 (京大・理)

京都北山から北には、丹波層群のⅠ型地層群が八丁背斜(シンフォーム)を中軸にして、東西にひろがっている。この地層群は三疊紀からジュラ紀のチャート層と、ジュラ紀新世の碎屑岩層がほとんどである。周山向斜などのシンフォートを作る丹波層群のⅡ型地層群にはベルム系を主とする緑色岩やチャート層があるが、Ⅰ型地層群には古生界はないとされてきた。

Ⅰ型地層群にも古生界が含まれることは前に報告したが、それは京都市左京区大悲山の石灰岩体(乳岩、フズリナの *Codonofusiella* sp. を含む)と、大津

市坊村のフズリナを含むハイアロクラスタイトとである。ともに小岩体でジュラ系と思われる泥質岩の中にオリストリスとして入っているものである。

北桑田郡美山町の河内谷南部には東西に続く緑色岩があり、丹波地帯研究グループによって海ユリの垂をふくむ石灰岩の小岩体のあることが発見されていた。いっぽう同緑色岩体中の別の石灰岩体にサンゴ化石のあることが報告されている(岡本・近藤・日下部・港, 1972)。しかしその属・種は不明で、断面写真のほかは標本も残っていないので、確かめられない。京大資源工学教室には石灰岩の標本が残っていたので、日下部吉彦氏の御好意により蔭片を作って検鏡することが

第5図
丹波地帯中央部地質図

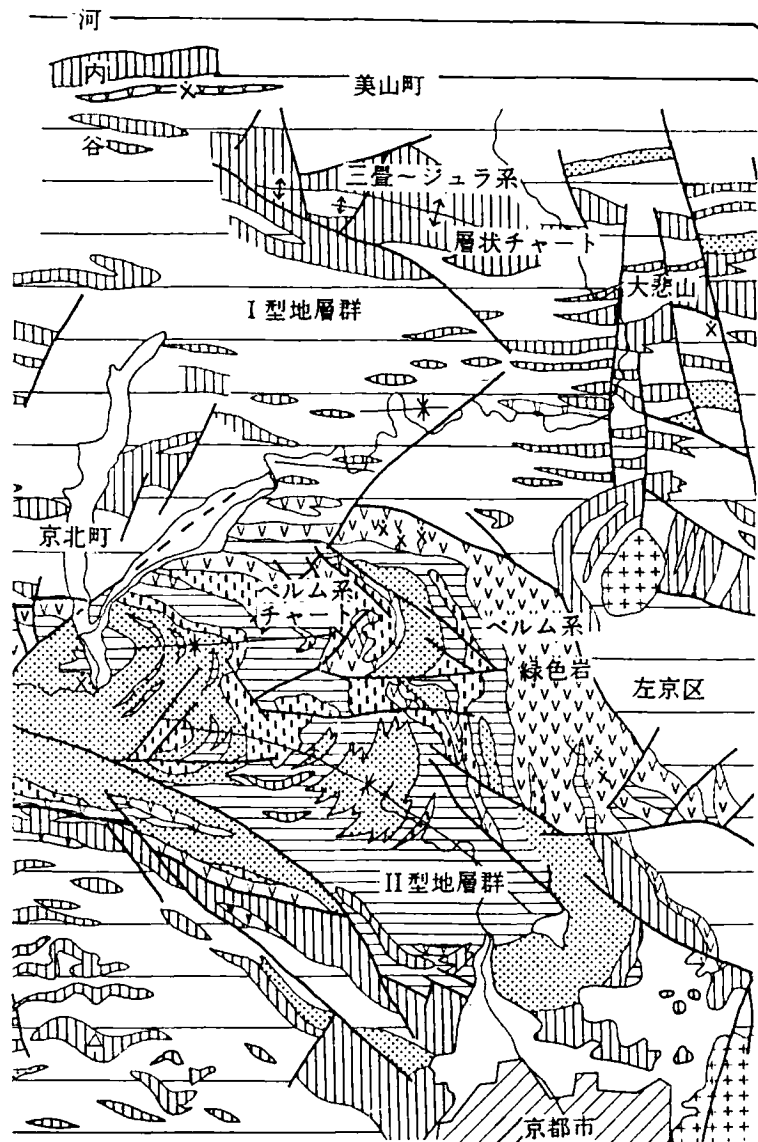


Fig. 5
Geological Map of
the Central Part
of the Tamba Belt

できた。

その石灰岩にはフズリナの *Toriyamaia* sp. と *Schubertella* sp. が認められる。*Toriyamaia* は九州の小崎層から勘米良 (1965 英) によって報告・命名されたもので、ペルム紀初期をしめす。このことから、緑色岩層はすくなくともペルム系であるといえる。

この緑色岩層の北に接して東西にのびる珪質頁岩層があり、それは北へ(上位へ)層状チャート層に移り変る。珪質頁岩から層状チャートへの連続は丹波帯各地に見られる I 型地層群下半部にあたるもので、三疊紀古世の後半からジュラ紀までの連続層序をしめす。

緑色岩層と珪質頁岩の関係はまだ確かめられていないが、ペルム系と三疊系の層序関係は重要な問題であり、今後調査をすすめる予定である。(第5図)

この緑色岩層は枕状溶岩部もあるが、大部分はハイアロクラスタイトあるいはピロープレッチャである。河内谷本流では凝灰角礫岩があり、ピロープレッチャ、チャート様珪質岩などの角礫が見られる。また白色の火山岩(安山岩様)の角礫のあることも注目される。

終りに石灰岩資料の利用を許可された日下部吉彦氏に感謝する。

岡山県棚原東方地域における舞鶴帯と“上郡帯”の地質関係

徳岡隆夫・渡辺暉夫・石賀裕明・西村貢一・PILLAI, C. D. L.・中 孝仁・三宅康幸(島根大)・桑原希世子(大阪市大)・LANDIS, C. A. (オタゴ大)

従来より夜久野複合岩類、舞鶴層群と上月層の三者の関係については議論が多い。演者らは岡山県棚原東方地域(五万分の一地質図幅周匝(光野・大森, 1965)の北東部)において舞鶴帯と上月-龍野帯(猪木・後藤, 1981)の地質関係を調べるとともに、夜久野複合岩類と呼ばれてきた岩石についても検討した。

検討地域には北から上月-龍野帯の上月層、“夜久野岩類”、舞鶴帯の舞鶴層群がほぼ北西-南東の走向をもって分布する。今回の検討では、夜久野岩類は火成岩体からなる部分と、この火成岩体に由来する角れき岩からなる部分とに区分でき、前者を狭義の夜久野岩類、後者を分布地の名称をとり殿敷層と仮に呼んで

おく。

上月層、夜久野岩類、殿敷層は南西に30°~40°傾斜した構造をもち、それぞれ層面に平行な断層でくり返している。舞鶴層群と殿敷層は北東に高角度で傾斜する断層で接しており、この断層は舞鶴層群の層理を切っている。

上月層: 検討地域内では主に玄武岩質溶岩、凝灰岩からなり、粘板岩や珪質岩を含む。明瞭な枕状溶岩も認められる。粘板岩には砂岩や酸性凝灰岩、チャートの薄層を含む部分もある。また、これらの岩石の細角礫を含む部分もある。東隣の上月層の粘板岩からはペルム紀新世前期の放散虫 *Follicucullus bipartitus*, *F. charveti* が発見されている (PILLAI and ISHIOGA, in press)。

夜久野岩類: 斑れい岩を主とするが、含斜長石珪長質岩も含む。斑れい岩は粗粒ないし中粒で層状をなすこともあり、またペグマタイト脈に切られていることもある。上月層の玄武岩とは断層関係にあり、その境界には蛇紋岩が貫入している場合もある。

殿敷層(新稱): 斑れい岩、斜長岩などの角礫を含む礫岩を主とする。基質はごくわずかで、泥岩からなる。一部に亜角礫ないし亜円礫を含み、淘汰をうけている部分もある。黒色泥岩を礫として含むこともある。また殿敷や柿ヶ原、高原北方には厚さ100~200 m におよぶ黒色泥岩層が分布する。これらの泥岩層は次にのべる舞鶴層群の泥岩と類似するが、分布は連続性に乏しい。今回、殿敷の泥岩からは *Pseudoalbaillella* cf. *sakmarensis*, *Ps.* sp. が得られ、この泥岩層はペルム系下部を含むといえる。

舞鶴層群: 黒色泥岩、細・中粒砂岩を主とし、泥岩~砂岩の互層も含まれる。放散虫にもとづく本地域の西方の棚原周辺地域の検討では、泥岩は *Pseudoalbaillella* sp. C-*F. scholasticus* までの群集を産し、ペルム紀中世の前~後期にわたる(西村, 1987)。

今回の検討で、従来夜久野岩類として一括されていた地層は火成岩体と角礫岩を主体とする堆積層(殿敷層)に2分できることが明らかとなった。殿敷層は夜久野岩類の火成岩に由来する角礫とともに、舞鶴層群の泥岩に類似する泥岩が含まれる。従って、夜久野岩類は殿敷層の基盤岩をなしていたとともに、舞鶴層群を堆積した海域内で殿敷層も形成されたと考えられる。

飛驒帯の西方延長：とくに鳥取県大山西方溝口町で発見された片麻岩と圧砕岩類について

石賀裕明・西村貢一(島根大・理)・鈴木盛久(広島大・理)

飛驒帯は西南日本内帯のもっとも北側の変成帯で、先カンブリア系を含む飛驒変成岩類からなり、現在は中部地方の飛驒地域から、隠岐にかけて分布する。飛驒帯は飛驒変成帯と宇奈月変成帯に区分され(Hiroi, 1981)、その南に分布するジュラ紀付加体を主とする美濃帯とは飛驒外縁帯により境されている。飛驒外縁帯の西方延長については陸上での岩石分布が限られていて不明な点が多いが、福井県のかれい崎では、美濃帯の北をとおり、そして、京都府丹後半島の袖志では新第三系岩脈中のゼノリスに見られる飛驒外縁帯に多産する圧砕岩類の検討から、飛驒外縁帯は袖崎を通るとされている(野沢, 1985)。ここより西方では隠岐に分布する片麻岩までは飛驒帯および飛驒外縁帯の陸上での証拠はこれまでは知られていない(野沢, 1986)。ただし、島根県下では島根半島に分布する中新統古浦層からの礫と火山岩の性質から飛驒帯分布の南縁が島根半島付近に引かれている(Miura, 1970; 三浦, 1973)。

筆者らのうち西村、石賀は山陰地域の中・古生界の検討中に、表題地域において片麻岩、花こう岩質圧砕岩類が分布することを発見した。この知見は西南日本内帯の地帯構造区分および各帯の分布を検討する上で重要と考えここに簡単に報告する。

片麻岩、圧砕岩発見地点付近の地質概要：今回片麻岩、圧砕岩類を発見したのは鳥取県大山西方の溝口町で、JR線伯耆溝口駅東北東約2.5 km、大内の集落の北の沢の入口から東北に250 mの地点(地点1)である。大山西方の地域の基盤岩を構成する中・古生界は広く大山の第四系火山岩、火砕岩などに覆われているが、小区画をなして、白亜紀花こう岩類や三郎変成岩が分布するとされていた(津久井, 1984など)。地点1では河床と山の斜面に花こう岩質圧砕岩が露出している。

この地点の上流約10 mの地点で転石として片麻岩が発見されたが、後に同様の岩石が付近の河床に露出しているのが確認された。以下に両者の記述とその帰属についてふれる。

岩石記載：

1. 片麻岩(転石について)本岩は角閃石に富む優

黒質部と、珧長質の優白質部が数mmオーダーの細かい互層をなす角閃石片麻岩である。主要構成鉱物は角閃石、黒雲母、斜長石、カリ長石、石英、アパタイト、ジルコン、Fe-Ti酸化物であり、二次的変質鉱物として緑泥石、緑簾石などがみられる。角閃石はZ軸色が青緑色～緑色で、mg値=0.34～0.38のferro-hornblendeである。Ti含有量は低く0.08～0.12(0=23)の範囲を示す。また、結晶周縁部は一部淡緑色のアクチノ閃石に改変されている。斜長石はアルバイト集片双晶が顕著に発達し、また弱い累帯構造を呈する。組成はコア部でAn=39～45、リム部でAn=36～37の領域におちる。カリ長石は少量で、パーサイト構造を有する。以上の鉱物的特徴からみると、本岩は塩基性～中性火成岩類(凝灰岩?)が下部角閃岩相程度の広域変成作用を受けた結果形成されたものと考えられる。

2. 圧砕岩 本岩は優黒色を呈し、主要構成鉱物は角閃石、黒雲母、斜長石、石英、アパタイト、ジルコン、Fe-Ti酸化物であり、二次的再結晶鉱物としてアクチノ閃石、緑簾石、緑泥石などがみられる。角閃石は草緑色のZ軸色を呈しmg値=0.06～0.15のferro-edeniteである。Ti含有量は低く0.01～0.03(0=23)の範囲を示す。また、結晶周縁部は一部淡緑色のアクチノ閃石に改変されている。黒雲母は完全にオパサイト化している。斜長石はA-およびC-双晶を呈し、それらの双晶面が著しくどう曲しているのが特徴的である。累帯構造はみられず、An=0.9～3.3程度のほぼ純粋に近いアルバイト組成に改変されているが、一部にAn=92に達する灰長石も残存している。これらの粗粒結晶の間を細粒～微粒の石英、斜長石、アクチノ閃石、緑簾石が充填している。再結晶アクチノ閃石はmg値=0.46～0.47のferro-actinolite～ferro-actinolic hornblendeである。以上のことから、本岩はトータル岩を原岩とした圧砕岩で、圧砕作用と同時に緑色片岩相程度の条件で再結晶したものと考えられる。

片麻岩および圧砕岩の帰属：角閃石片麻岩は、その産出場所から考えて起源を飛驒帯にもとめるのが妥当であろう。飛驒高原には同種の角閃石片麻岩が広く分布するが、それらは一般に上部角閃岩相以上の変成条件を示す。それらに含まれる角閃石のTi含量は0.14～0.24(0=23)、斜長石はAn=42～52の領域を示す。従って、今回見出された片麻岩は、飛驒高原のものに比べやや変成度が低いようである。なおKO-

JIMA et al. (1968) は山口県金峰山の大山系安山岩類中の捕獲岩に角閃石片麻岩を見出し、その起源を飛騨帯にもとめた。その岩石においては、角閃石が不透明鉱物と単斜輝石の微粒集合体に改変されていたり、結晶粒間に無色の火山ガラスが存在するなど、母岩となった安山岩マグマによる二次的影響がみられるが、今回の試料にはそのような形跡は全く認められないので、火山岩中の捕獲岩とは考え難い。

圧砕岩の帰属については、さらに検討を要するが、現在のところ例えば飛騨外縁帯～長門構造帯にその起源を求めうる可能性を考えている。いわゆる山陰花崗岩に起源をもとめることは、本岩中の残留角閃石のmg値が異常に低いことから困難であろう。

マントル・ウエッジ部に間欠的に誘発される 渦とマグマの発生

伊藤英文・木下 修 (大阪府大・総合)

ハワイ海山列は一見N70°Wに並んでいるようにみえるが、Jackson et al. (1975) はそれを詳細に研究して、海山列の軌跡の接線方向はN30°WからN90°Wの間で42 Ma以降、7個の極値をもって振動して来たことを示した。つまり太平洋プレートの運動は、方向が一定していたのではなく、激しく変化して来たのである。そして彼らは極値の時期と環太平洋の火山活動時期に関連があることを示唆した。

増田 (1984) は、日本列島の42 Ma以降の火成岩のK-Ar年代のヒストグラムを作成し、Kennet et al. (1977) の北アメリカ北西部、中央アメリカ、南西太平洋のK-Ar年代ヒストグラムと比較した。これによると、16～14 Maと2 Ma～現在に著しい火成活動のピークがあり、その他にも小規模なピークがある。われわれは環太平洋に共通すると思われる二つのピークに注目したい。以上のデータの地域は新生代を通じてプレートの沈み込み帯である。なぜ沈み込み帯

に火成活動がエピソードに起こるのであろうか。

われわれは、沈み込むスラブは島弧下のlow Q・low V層に渦を誘起させることができると考えている (木下・伊藤, 1986)。渦発生のためには、low Q・low V層のスラブ面上の粘性せん断応力は両者間の接着応力よりも小でなければならない。low Q・low V層が深さ50～150 kmに存在し、スラブ沈み込み速度が10 cm/yrで、low Q・low V層の粘性係数が 10^{20} poiseであれば、粘性せん断応力は34～40 barとなる。この値は多分接着応力より小であろう。粘性係数が 10^{21} poiseならば、せん断応力は10倍となり、接着応力よりも大となろう。ここで 10^{20} poiseという値はアセノスフェアの推定粘性係数の最小値であることに注意したい。

以上より、今回われわれは、渦は常に発生するのではなく、何かの切っ掛けでエピソードに起こると考えるに至った。切っ掛けを上記のプレート運動の方向変化に求めることができよう。いま渦のない状態が長く続いたとする。その時のlow Q・low V層の温度勾配は5°C/kmと考えてよからう。ここに渦がエピソードに発生したとする (高粘性流体の流れは短時間に定常状態となる) と、深さ130 kmにあるマントル物質は4 Myで深さ70 kmまで上昇する。これにより物質は部分熔融をひき起こし、マグマの発生が起こるにちがいない (詳細は木下・伊藤, 1976参照)。一方上位の冷たい物質は下降して下位に入り、low Q・low V層の温度は平均して下がる。ゆえに粘性係数は増大して渦が止まる。厚さ100 km層の温度が乱されて、それが元に回復するには10 My以上の時間が必要であるとわれわれは考えている。

(参考文献) 木下修・伊藤英文, 1986: マントル・ウエッジ部の誘起渦とマグマの発生. 火山, 31, 29-38。

日本地質学会関西支部規約

- 第 1 条 本支部は「日本地質学会関西支部」と称します。
- 第 2 条 本支部は地学の進歩発展及び普及と会員相互の親睦とを図ることを目的とします。
- 第 3 条 本支部は北陸3県、近畿2府5県、山陰2県、四国4県に在住する日本地質学会々員及び地学に関係し特に入会を希望するものを会員とします。
- 第 4 条 本支部に左の部会を置きます。
北陸部会（富山県、石川県、福井県）
京都部会（滋賀県、京都府、三重県、奈良県）
阪神部会（大阪府、和歌山県、兵庫県）
山陰部会（島根県、鳥取県）
四国部会（香川県、愛媛県、徳島県、高知県）
- 第 5 条 本支部の運営は京都・阪神部会が二年毎に行なう。
- 第 6 条 本支部は第2条の目的を達成するために次の事業を行ないます。
講演会（例会）、講習会、見学旅行、懇親会、支部報の発行、その他目的達成のため必要と認められる事項
- 第 7 条 本支部運営の基本方針を決定するため、年1回総会を開きます。
- 第 8 条 本支部運営の執行機関として左の役員を置きます。

支部長 幹事7名

- 支部長及び幹事の任期は1年とします。
但し重任は差支ありません。
- 第 9 条 支部長は支部会員が互選し、又幹事は各部会毎に選挙或は推薦し、総会に於て承認を受けるものとします。
幹事は運営担当部会 3名 他は各1名とします。
- 第 10 条 支部長及び幹事は「幹事会」を組織し、総会の決議に基づき業務執行の方針を決定します。
- 第 11 条 支部長は本支部を代表し日本地質学会との連絡に当たります。
支部長事故あるときは支部長の指名する幹事1名がこれに当たります。
- 第 12 条 幹事は本支部一切の業務を執行します。
- 第 13 条 本支部会員は会費として年額1000円を、納入するものとします。
正当の理由なく1ヶ年以上会費を滞納した会員は幹事会の審議を経、支部長承認の下に行事の通知状、支部報などの配布を停止することができます。
- 第 14 条 本支部規約は総会に於て出席者の過半数の賛成を得て改訂及び附加することができます。
- 附 則 本規約は、昭和54年6月16日より施行します。

1987年9月10日発行
日本地質学会関西支部報 No.103
606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部地質学鉱物学教室内
日本地質学会関西支部
支部年会費 1000円
振替口座 京都9-22368